

麻酔科・ペインクリニック

■ スタッフ（項目見出しスタイル）

科長		丸山	一男
副科長		横地	歩
医師等の数	常勤		3名
	併任		2名
	非常勤		1名
	鍼灸師		4名

■ 診療科の特色・診療対象疾患

1. 特色（中見出しスタイル）

1) 統合医学的アプローチ

ペインクリニックには、ペインクリニック外来、漢方外来、鍼灸外来、緩和外来を併設しています。

難治性疼痛や慢性疼痛、あるいは、癌性疼痛や非癌性疼痛といった疼痛の治療を行うとともに、広い範囲の様々な症状に対し、統合医学的アプローチを視野に入れた診療をおこないます。

2. 主な診療対象疾患

1) 帯状疱疹後神経痛

薬物療法が主体となりますが、局所麻酔薬によるブロック注射にも、一定の役割があります。

2) 神経障害性疼痛

有痛性糖尿病性神経障害、絞扼性末梢神経障害、脳卒中後痛、脊髄障害性痛、幻肢痛、腕神経叢引き抜き損傷後痛、CRPSなどがあります。様々な治療を組み合わせています。

3) 筋・筋膜性痛症候群

骨格筋・筋膜が、持続的緊張・収縮によって局所循環不全をきたすと、その部位に発痛物質が蓄積し痛みとなります。痛み刺激が脊髄に入ると、反射的に運動神経や交感神経を興奮させるので、筋収縮や血管収縮、局所循環不全がさらに悪化します。この痛みの悪循環路が病態と考えられています。原因となっている基礎疾患の検討も重要です。

4) がん性疼痛

治療はWHO方式がん疼痛治療法から開始します。適用があれば、ブロックもします。癌が原因ではない痛みも併存していますので、痛みの原因に合った治療を選択します。様々な局面で、しばしば、せ

ん妄が併存します。せん妄は、症状等の把握を難しくしますので、早期から対応しています。患者や家族をとりまく多岐にわたる問題には、タイミングよく各部門と連携することを重視しています。

5) 顔面・頭部の痛み

多様な疾患の痛みが考えられます。それぞれに応じた治療を行っています。痛み以外でも、三叉神経麻痺、突発性難聴、アレルギー性鼻炎等については、星状神経節への働きかけが有効です。

6) 胸・腹部の疾患、頸・肩・四肢の痛み

腹部内臓の痛みは、背部など体幹の筋肉に現れることがあり、同部の筋肉痛に対する治療で改善することがあります。会陰部痛には、仙骨硬膜外ブロックの他、内服薬や、精神・心理療法を併用します。

外傷性頸部症候群、頸肩腕症候群、肩関節周囲炎、坐骨神経痛、変形性膝関節症等には、ブロックや、薬物療法等を行っています。

四肢の血行障害の痛みには、近赤外線照射、ブロックや、オピオイド投与などを行っています。

7) 脊椎疾患

多種多様な疾患があります。整形外科をはじめ、関係部門と連携した病状把握が大切です。ブロック、理学療法、薬物療法等を併用しています。

8) 漢方外来の対象疾患・対象症状

器質的疾患から機能的疾患まで、あらゆる症状が対象です。特に西洋医学的にはっきりとした診断がついていない、機能的症状について高い効果をもたらすことがあるのが特徴です。従って治療法が確立されていない症状や、なんとなく調子が悪いといった、あいまいな状態でも、その体質の偏りを伝統医学的な見地から判断し、そのゆがみを治していくといった、局所ではなく全身に働きかける治療が行えます。また、西洋医学的にすでに治療が行われているにもかかわらず、十分な効果を認めない場合や、その副作用などで治療に制限が出る場合などでも、漢方薬を併用することでさらに治療効果が高まることもしばしば見受けられます。食療養や生活習慣の改善でもよくなる状態を、生薬の力で改善させることが漢方治療の目標です。西洋医学的薬剤よりもはるかに副作用の少ない漢方薬治療は、生後間もない赤ちゃんから、積極的な治療のはばかられる高齢者の方まで、幅広く対象となります。

9) 鍼灸外来の対象疾患・対象症状

対象は多岐にわたります。肩こり、腰痛、膝痛、その他の関節痛など身体の様々な痛み、しびれの他、だるさ、不眠、手足の冷え、食欲不振といった身体の不調などです。癌の化学療法の吐き気や、膵臓癌の背中への痛みも対象です。西洋医学的な異常が見つからないものの、苦痛や不快感、ストレスを感じるような症状がある方、または薬剤使用に抵抗がある方や、薬剤が副作用で使えない方などにも、代替医療として用います。

■ 診療体制と実績

診療時間は、ペインクリニック外来が月火木金の午前、漢方外来が火水の午前と月火水木の午後、鍼灸外来は水金の午前と月火水木の午後、緩和外来は金曜午前を基本とし適宜相談にて対応しております。入院の癌性疼痛や慢性疼痛には、休日を含み、可能な限り連日の診察にて対応しています。

当科スタッフには、ペインクリニック専門医、麻酔指導医、集中治療専門医、救急専門医、緩和暫定指導医が含まれます。鍼灸師は国家資格取得者です。

(年度総受診のべ数 7964、総実症例数 683)

■ 診療内容の特色と治療実績

1) ペインクリニック外来

局所麻酔によるブロック、薬物療法、光線治療などを併用して、疼痛等の症状を治療しています。薬物療法では、痛みの発生機序に応じ、神経経路の各部に作用する薬剤を使いわけています。オピオイドや鎮痛補助薬の使用経験は豊富です。

(年度受診のべ数 3964)

星状神経節ブロック 234 件
 仙骨硬膜外ブロック 269 件
 トリガーポイント注射 773 件
 三叉神経ブロック 135 件
 その他のブロック 66 件
 消炎鎮痛処置（近赤外線照射等） 2808 件

2) 漢方外来

エキス剤、煎じ生薬など、保険収載の医療用漢方製剤を用います。中国伝統医学や日本漢方、及び、現代医学的エビデンスに基づく考え方で、より確実かつ臨機応変に、刻々と変化する多様な症状に対応します。最新の情報を入手しつつ、養生的な生活指導、予防医学的見地なども取り入れ、全身状態を改善に導くよう努めます。数値化できにくい症状を、様々な評価ツールなどを用いて客観性を持たせ、治

療の効果を判定し、その確実性を上げられるよう努力しています。診療は初診再診とも完全予約制とし、患者さんの全体像を把握できるよう、20～30分の長めの診察を行っています。大学病院における癌診療、また難治性疾患に対しての先進的医学治療への側方支援的サポートや、その限界に対しての補完医療としての役割をしっかりと担うことを目指しています。特に乳癌手術後のホルモン治療など、長期的に使用する薬剤の副作用を軽減することで、軽快に生活を送ることのできるサポートとしての漢方薬の位置づけなどについて研究しています。また、鍼灸といった伝統治療を漢方と融合させ、より満足度の高い補完医療を目指します。

(年度受診のべ数 1663)

3) 鍼灸外来の対象疾患・対象症状

「四診」で、患者さんの状態を把握します。「問診」で、症状や生活習慣、体質、体調などを聞き、「望診」で、全身状態、局所状態などを見、「聞診」では声音、呼吸などを聞き、「切診」では脈や体表に触れることで必要な情報を収集します。状態から経穴（ツボ）を選択し、鍼（ハリ）や灸を用いて施術します。症状と向き合うため、40～60分の診療となりますが、患者さん自身はほとんど横になっているだけです。安全性と有効性がある程度はしっかりしている伝統医学を現代西洋医学の現場に取り入れることで、統合的な治療とケアを目指しています。

(年度受診のべ数 1675。うち、入院中 497)

(入院の実症例数 34。うち、癌の症例数 20)

4) 緩和外来*

「生命を脅かす疾患に伴う問題」に直面する患者と家族が対象です。疼痛、せん妄、社会的不安等の問題を解決に導くことで、苦痛を軽減し、生活の質を向上させます。関係各部門と連携します。入院患者には、休日を含む連日の回診を基本とします。

(年度受診のべ数 662)

■ 臨床研究等の実績

- ・治験や市販後調査に積極的に参加しています。
- ・慢性疼痛でのオピオイド使用の経験が豊富です。
- ・認知行動療法的手法の導入を図っています。
- ・慢性疼痛における一酸化窒素の役割等、痛みのメカニズムの研究を行っています。

▶ <http://www.hosp.mie-u.ac.jp/> (ホームページ)